

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2026. 3



令和8年3月1日発行(毎月1回1日発行)第74巻第3号

No.814

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二六年 三月号 (通巻八一四号)

◇今月の二十首詠……八月の広島 若松喜子 2

■作品A 市原やよひ・梅本武義他 4

A 若林美知恵他 18

B 糸島美津子他 46

C 池上久代他 56

A 菅野み江他 68

■オリープ集 大久保麗子・大寺智子他 34

◇今月の二人 さこだときえ・住田ひさ代 14

私と短歌との出会い (283) 藤野喜美子 17

■小関茂歌集『宇宙時刻』を読む 中須賀美佐子 28

口語自由律で何を表現しようとしたのか

■〈第一歌集を読む〉36 江尻リエ子 32

関根和美歌集『緑のアタマジオ』

—愛さえあれば—

◇色のアンソロジー 〈青〉 田土成彦 40

■遊覧香港〈記憶の種から育つもの〉 中西淳子 42

■歌壇月旦 西堤啓子 43

穂村弘の「短歌のガチャポン、もう一回」をめぐって

■一月号作品批評 60

A……上林節江・大寺智子

河上悦子・鳥根美智子

B……中村博子・八田暁美

C……河野繁子

オリープ集……三好聖三

十首選 土井谷恭子・佐藤 昌 44

今月の二人・作品評 久我田鶴子 16

靖子のへなちよこ指南 滝田靖子 45

人間の夢を見る時刻 小関茂歌集『宇宙時刻』 13

第20期オリープ集メンバー表 45

最近の歌誌より (編集部・高尾) 78

第72回地中海全国大会 (東京大会) ご案内 79

クリップ……80 神田通信……表3

(表紙デザイン) Tazuko Kuga

## 八月の広島

若松 喜子

ちまたに標語のごとき詩句あふれ戦後八十年広島の夏

八月八日別船を仕立て壊滅のまちに入りたる若き日の祖母

今にして知りたきひとつ祖母と伯母の一途な思い入市被爆の

出征の息子を捜しし祖母なりき練兵場にいるはずの長の子

次男の父高知の隊に居しという多くを語らず聞かず誰もが

たまたま居なかった父ヒロシマの多くを語らず生き運とのみ

校庭で来る日も来る日も遺骸を收容せしとう叔父十八歳

戦後に師範学校がそのまま大学となりわれら学びぬ

一九四八年 広島県生まれ  
昂グループ所属  
歌集に「砂嘴のソクラテス」「車椅子の  
うた」がある

八十年前被爆の記憶をたどる旅開いてしまった記憶の扉

八十年前のことですヒロシマそうだったのかそうだとしても

ヒロシマ悔しかったろう祖父が行かなかったのでなく行けなかった

今何時かなんども何度も問う祖父にそのつど時計を見ては答えぬ

胡坐居のいつもラジオを聴いていた物知りだった盲目の祖父

「壁際の自分は助かり」Ｔ先生話はいつもそこから始まり

釘・螺子・フィルムケース抽斗はなにやら楽し先生の机

講堂で怖いはなしを聞いたあと漏らしてしまった八月六日

爆弾とか怖いはなしは大嫌いおばあさんになっても嫌い

僧侶の父によく似し少年のいま合掌のかたちうつくし

「恙無し」辞書にその字を確かむる近頃漢字とんと忘れて

左手で書くはがきなりありがとう野を大きくはみ出す平仮名

# 作品 A

市原やよひ

初雪

・萬

初雪は正月二日夕暮れの静まる街を尚も鎮めて  
降る雪を見るは楽しえ天からの白きちいさきこの贈り物  
外灯に映し出されて降る雪は光持ちつつアスファルトに消ゆ  
ふんわりとポストに積もる雪に照る月はいつしか中天にありて  
雪少し残れる境内初詣の列は静かに進みていたり  
白き花咲くかと思ゆる木のありて近づけばおみくじあまた結ばる  
それぞれの願いを込めて結ばるるおみくじ正月の風物詩めきて

梅本武義

去年今年

・羊

ノルマ無き老いの耕作とはいえずと目標はあり今日もどうにか  
休憩の児らが勝手にたたく音伝統芸能太鼓の魅力  
去年今年初期に分かりし癌三つまだ晩酌の美味き幸せ  
ひこばえの刈田のわが里夕焼けて団地の人らの散策コース  
まだ熊の恐怖なき里夕光に映ゆる熟柿に小鳥群れ来る  
スキー場を走り迫り来る熊の画像を一瞬疑う世なり  
ガザの児の爆死続くをトランプに新設をして平和賞とは

磯田ひさ子

アガベ

・森

鶴頭に挿しし水仙の花茎を少し高くし春を招きぬ  
幸先の良きにあやかりふるさとの日本一とふ蓮根を煮る  
ミニチュアのアガベの盆栽テーブルに飾り一人の年改まる  
あかむらさき 紫紺 麴塵 若きらが襦を受けて渡す駅伝  
駅伝に懸けし若きが「四年間泣いて笑った青春だった」  
四年間熱く過ぎし卒業後ひとたびも会はず逝きしも多く  
身を軽くするもむべなり幾人か今年限りといふ年賀状

大浪美雪

時鐘

・森

花のなき上野の山の吟行会銀杏もみちに照らされてゆく  
大銀杏こがねの色に輝きぬ光ありてこそのもみちば  
もみちばの降り頻く銀杏見上げをり幼きころにかへるここに  
東照宮脇の茶店に下がりをる手書きの札に cash only  
絵馬の中ハンゲルのあり英語あり権現様に何を願ひし  
蕉翁も聞きし鐘の音届きたり令和の今も時を告げをり  
不忍池に渡りの鴨数羽キンクロハジロの見えぬ寂しさ

奥田陽子 ひかり

・羊

池の面に映す黄の色立つ樹樹のかがやきはやも失せつつ揺るる  
ようやくに出揃いたらん芒穂の触れたる指にまだやわらかき  
翡翠の来たれどまばゆき夕光のもなかり行きしかはや見失う  
落葉踏む音のつきくる道をゆきわすかもれ来る光を仰ぐ  
夕ひかり射しける川に鴨たちの泳ぎそめたりささやく如く  
おそわれし鳥の死骸の散乱を見たれど臆の草の道ゆく  
照葉道ささめきてゆく少女らの声の入りくる高さに居たり

神田鈴子 バティシエ

・大

高二の孫バティシエ衣装に身を包み見事に仕上げぬクリスマスケーキ  
わが指示にうなづきながら口結びきりりと動く姿に見惚る  
去年までは食ふるばかりの孫なりしが別人のごと作業に励む  
孫がいま作り上げたるケーキ二台上に飾れるイチゴが光る  
難しきチョコレートケーキを仕上げたる孫の笑顔に拍手を送る  
高校の選択科目にバティシエを選びしと聞き驚き隠せず  
いつの日か一人前のバティシエに成る日を夢みる女孫頼もし

上林節江 めざすは

・湾

腎臓を長もちさせるためならば飲まねばなるまい新聞発案  
ウイルスも菌も通さぬ咽なれよ日にくたびもうがいに励む  
酷使せすゆるゆるを身に許しゆくめざすは百歳まだまだ彼方  
風邪をひくよりはましよと電気代おしませず使うヒーター、こたつ  
始まりぬ仙台ひかりのベージェント今夜のわれはぬいぐるみの兎  
湯たんぼのついに登場イブの夜ビールの小缶ひとつに冷えて  
気温五度なれどお日様さそうから背すじを伸ばしめざす五千歩

菊地栄子 ともしれば

・海

丁寧に生きてはおらぬ恥ずかしきハンガリーのジャケット片側に寄る  
目標は八十八歳の敬老会近所の友と出席誓う  
シラカシの葉群きらめく秋日和一泊のみの姉妹旅終う  
カマキリに触れなば糸より細き下肢かすかにふるう命をふるう  
庭畑に今年実れる四十個ひそむ恐怖は木守りとせず  
抵抗を感ずる冬の風となる五冊携う図書館帰り  
ともしれば月日の早さに追いつけずすてに伸びたつ手の爪を摘む

河野繁子 朝の月

・雁

起きたらし家の灯あちこち灯り初め師走気忙し山映の町  
家々の屋根を照らせる朝の月とどかぬ影の漆黒の闇  
とおき日は兎のおりし月なれど人間いぬかところ遠のく  
通りすがりの人間とう台詞に涙し今朝の「ばけばけ」  
つながらず通りすがりの人間とう胸にしみいるヘブンの孤独  
チャップリンの映画がいいと呟きし出来ればかの世で会いたき一人  
側をまつ雛鳥のよう買物頼みし娘の帰り待つ夕

小林能子 復路に小旗

・羊

吾が町に神社庁あり先の見えぬ師走の風にはためく「日の丸」  
存へてこれが最後の手作りの御節料理かと細き牛蒡叩く  
まどろめば箱根駅伝復路に小旗ふる割京若姿 母のまぼろし  
よき友と「リハビリ初め」ペコちゃんの噂なやら戦前のこと  
初場所の番付表の傍らで「浜あられ」工場閉鎖の件  
儲け話すべて断り女手に「あられ」工場閉ちしを語る  
後始末簡単ではない災害に紛争戦争 もう一つ魔炉

## 近藤芳仙 この日頃

・信

国交の不安な国に居りし子がいよいよ帰国へ本腰上ぐる  
 仏壇に時には笑まふ亡夫のゐて心通ひし心地はすれど  
 写メールに日毎見てゐる我が曾孫 育ちゆく跡明らかにして  
 この日頃遅き日の出に慣らされて朝ドラまでに漸く起きる  
 真夜中も窓の灯消えぬ庁舎あり何処かで事件起きてゐるのか  
 預かりし歌稿の重み 半年を向き合ひをれば親しき作者  
 文学祭の講評といふ任終はり今宵独りの静かな宴

## 坂上直美

令和七年冬

・天

あす遂に雪降るといふ震えつつ清められゆく景色を思う  
 冬の日にはセーター帽子マフラーと母の手編みにくるまれたりき  
 あすは雪 紅葉の谷も降るならん鬼女よ庵に籠もり給えな  
 去年今年我に貫くものやある なしとは言わず細くあれども  
 賜りし純米吟醸大吟醸あたらしき年盃を干す  
 新年にひとり飲み干す盃よ君なき日々も強く生きなん  
 天空を翔けゆくことは叶わねど地に足をつけ歩めわが駒

## 坂出裕子

花水木

・洛

もうすぐに春が来るとささやいて番ふくらむ花の水木の  
 窓辺よりいつも見てゐる花水木ともに暮らせる家族のやうで  
 障子開けガラス戸越しに庭を見る 見るたび仰ぐ花の水木を  
 春が来て夏が来てまた秋が来ていつも新し伸びる枝葉の  
 おはやうと雨戸を開けておやすみと雨戸を閉める花の水木に  
 誰よりも私を知つてくれてゐるやうな気がする窓辺の木々が  
 あたたかな日々が続ける年の瀬の庭に拾へる山茶花の紅

## 佐藤道子 異変

・甲

ワンチャンに羽織袴を着けさせて出雲大社に旅をするとうふ  
 「リノチャン」は自分も人と思ふらし挨拶するも媚びることなし  
 寒風は西の空から吹きつづく地球の位置が変りしならむ  
 常のごとの天気図で説明の予報士さん当たる筈なし天気予報は  
 冬至より日毎に暗さは深まりぬ元旦六時真夜の大空  
 「目に青葉」の初壁師走のスーパーに容易く並ぶ御造りとして  
 十二月餅も棚に並びをり魚偏に冬と書かねばならず

## 柴田登志恵

海の藍

・天

明けちかくカニバサボテンがイゲアナに変化してより揺らく日常  
 道なりに歩みをりしがすこしづつ人住む街を離れゆくらし  
 さりげなくレースのカーテン引くやうに気付かれもせず逝きたからむが  
 ししむらのすきとほる魚あるといふレントゲン画像海の藍ゆく  
 六甲の尾根のあかるみかけるころ浜風を背に船舳り来ぬ  
 雲の間の六甲おろしを捉へつつ百合園ゆく街空高し  
 蒼空を映す海面を渡りゆく自転車列 百合園の群れ

## 鈴木結志

写経禅定

・福

餅肌のふっくら三重ね鏡餅神に捧げて初春を祝ぐ  
 自らの生きの配分自由度を写経禅定意気にみなぎる  
 出典は日本の書伝紫式部の「久海切」目に臨書して躍動に入る  
 表現は理知に富む芸今にある白寿の生きを豊かならしむ  
 うたは意書は自らの芸一筋に知力起こして生き力生む  
 利行とは一法あまねく自他を利す修証義よみておのれを正す  
 ロケ終えて御霊櫃畔のてっぺんに両手をあげる女優小百合さんに声援おくる

関根 榮子 格言

・埼

水仕事してふいに思いおり背の子供の「しもやけ」「あかぎれ」  
風出でて寒さつのれり夕刊を取る東の間もダウンを羽織る  
硝子戸に映りしわれを警戒しペランダの鳩の飛び立つ羽音  
大雪とう各地の便り若き日の越後湯沢のスキーを思う  
このように静まりかえる昼下がりと世間より忘れ去られて  
物事を日延へしており「今日のこと明日に延ばすな」の格言あれど  
離れても友情続きし六十年岐阜に住みし友の逝きてしまえり

関根 和美 存在

・埼

同じ文またも届きてそののちをふつつり途絶えぬバラのあとさき  
二十年病む娘を励まし祈りくれしシスターの身に異変のありや  
外出のゆるされて娘を迎えゆけばあふるる笑みに肩を抱きよす  
お御堂に娘を招き入れゆっくりとアペマリア唱う三たび唱える  
会えずとも神さま通しいつもここ ここにいるのと胸に手を当つ  
シスターと病む娘を結ぶたしかなる存在伝うる儀式のように  
もう一度名を住所をとペンを出すはや記憶より消えたるもわれら

高尾 恭子 ふるさと

・大

夕暮れを「家路」しずかに流れきて風の小僧が稲穂を駆ける  
田いち枚わずかに残すふる里の道に迷うな夕焼けトンボ  
数珠玉のように赤信号が点る道どこまで行ってもふるさと遠し  
洗濯物を畳んで広げて日が暮れる母は「ふるさと」口ずさみつつ  
切り札を使い果たした夕暮れを金木犀の香につつまれる  
夕暮れの芒の原の果てをゆく赤いリュックはゆれつつ消えぬ  
おもい草ひたすら探す風の道あとに戻れぬ日を背負いつつ

高津 砂千子 速記

・雫

高校の速記クラブで覚えたる文字忘れず八十路のいまも  
西日本大会の場所ゆ見おろしし神戸の街並みあざやかなりき  
西日本大会に行き競いたる速記の仲間いかにいますや  
神戸にて見かけし女の和服姿めずらしきかな六十年前  
頼まれて会議を速記せしわれら部員に誇りしかとありたり  
思い出は美しくまた柔しくも胸とどろかす年を経つつも  
年を経て失うものの数あるも速記は記憶の底を離れず

滝田 靖子 鍋焼きうどん

・新

ユウ今年二十七回忌だつたよねお墓のお花少し寂しいよ  
上手くいくやうで安心とLINE来るドラマの中の二人の恋が  
二人目の孫の写真を送り来る弟すつかりちいになつて  
柚子の香の残る身体に眠りゆく冬至の夜の仕来りとして  
冬枯れの梢を揺らして吹く風が今年の憂ひを連れ去つて行く  
旅の荷もほどかぬうちに新聞の連載小説読んでるまづ  
頑迷な父に振り回されてゐる友と黙して鍋焼きうどん

田土 成彦 二割引

・宙

航跡の波の背青くばうばうと光らせゆらぐ夜の海ほたる  
夜の潮に揉まれて放つルシュフェリン背きひかりは黄泉からのもの  
水母らは明日を煩ふこともなく長き触手を垂らし漂ふ  
唐突の人感センサーの光浴び訳わからねど身をすくめたり  
直角に颯下を曲がる人もありわれは大方まあるく曲がる  
午後五時から四割引の串団子売り切れたるか今日は見あたらす  
もふもふの冬のバジヤマの二割引思案の末に買はずに帰る

## 田土才恵 神事

・宙

## 永田進一

石清水八幡宮吟行

・山

馬の背に黒髪束ねつぶら眼の少年が行く坂駆け上がり  
 少年のいまだ幼きつぶら眼に宿る決意の今朝のかがやき  
 少年の神事に目覚めしこの秋を馬の背跨ぐその潔さ  
 長髪のおみなごのごとき少年の黒髪光る手綱とる背に  
 伝統の残る里より湧き上がる生きる力よその声援よ  
 AIなど有らざる世界の豊かさを知らしめて里の祭太鼓は  
 幻の祭り賑わう胸うちを飾細工ひとつ仕上がりてゆく

## 玉井綾子

年の瀬

・羊

## 永塚節子

歳月

・銀

中折れ帽と黒いコートの藤森さんの不在を誰も言わない師走  
 ジャージ着てキャップにリュック、茂木さんらしきが年の瀬の街角を  
 図書館の帰路自転車で人気なき住宅街に迷い込みたり  
 一戸建ての並びの先に寺と墓 塔婆の影が夜に浮き立つ  
 チェーン店あれど知らない店舗なり店の明るさに不安が募る  
 三十分しゃにむに走って行き詰まり知らぬ地名にスマホを灯す  
 スマートフォン持たずに外出することは財布がないより困る今の世

## 中島央子

短い秋

・森

## 仲西正子

友

・沖

夕風がわづかに短い秋を混ぜ霜月夕べ三日月光る  
 秋天の真青な空を見上げつつ銀杏並木の落葉踏みゆく  
 待つことも待たるることの無き日々よ靡く芒穂今日より師走  
 小春日を籠もるに馴れて紅葉の名所めぐりはテレビにて足る  
 週一度訪ひくる青年リハビリ師W・B・Cの話題の尽きず  
 孫の名前なかなか出でず焦りたり見えぬ恐怖が我に近づく  
 外つ国の戦争・災害の報道に何事の無き一日は暮るる

厄除けの八幡宮へ参詣す紅葉の絨毯踏みしめ歩みぬ  
 参道に鈴なりの柿たわわなり熊は出でずや人多ければ  
 石路は木漏れ日のなか八幡宮装い凝らす七五三詣り  
 立ち姿佳き女幼なを抱きおり阿吽の鳩の本堂拝む  
 高々と皇帝ダリア咲き誇る八幡宮の鳥居の前に  
 谷崎の筆の遊びの一節を展覧台の片隅に見る  
 松花堂小さき流れ鯉の群れ図書館一室に歌会開きぬ

迷うなく季をたがえず一花二花ほころび初むる蠟梅蠟月  
 蠟月の茶会の掛け物うべないつつし見つめたり歳月不待人  
 パソコンの画面に二羽のツノメドリ神の刺りしくちばし美しき  
 早仕舞いに心おどるらし二度ばかり背く男の子はスキップしつつ  
 両手を支えきたる天秤はもはや過去形さび色しるし  
 旅の途次に一世終えたる友なりきその名を呼べどこたまもあらず  
 おおかたは甲斐なき努力と分かりつつも方にひとつの衷りめざして

喜寿にして爪抜け替わるこの仕組みしみじみと見るこのピンク色  
 抜け替わる因果知らねど爪力ありて働く指先と知る  
 柔らかな爪まもりつつ脱ぎゆけるペン肝脈の指の古爪も撫す  
 友のライン介護ホームを移ること二行に記し余白の広し  
 三年を暮ししホームを移るとの友のラインに返せず見つむ  
 校庭をまた砂浜に遊びしよりハビリの友へ言葉を探す  
 連れだちて旅に行きしがはぐれたり夢より覚めて病む友浮かぶ

中村博子

枳殼邸

・漣

はるばると河村さんは静岡の片浜から京へみたりに会わんと外つ国の人も混じれる枳殼邸にひかる印月池ゆうるり眺む雅趣のある黒き木づくり侵雪橋渡り行きつお喋り弾む屋根のある回棹廊も木造の温もりのあり和める笑顔花見する傍花閣とう周閉には桜の樹々は春を待ちおり遠き日に明治天皇訪ねましし枳殼邸にてゆるりと過ごす桜咲く枳殼邸また訪ねんと河村さんは病む身忘れて

西堤啓子

梧桐

・天

「見慣れば妻はいつてもそこにある筆筒に同じ」と笑わせた講師学び舎に聴いた講義は梧桐のやがて根をはり風雨に耐える天文図黒板に描き講義する声聞こえくる著書との対話やわらかに空渡りゆくおぼろ月コベルニクスの宇宙をひとり駅前クマさんのイルミネーション今年また歳末となり楽しく光る空腹を知らぬティベアあどけなく四肢を伸ばして少女に抱かる渡航者にクマ注意報ハロウズのイギリスにクマはいないと知れり

浜谷久子

原種

・地

夏をかきりに仕舞う畑のはかどらぬ片付け積もり積もつた年月耕運機大鍬小鍬支柱など貰い手あればと選り分けてみる年上の先輩方を差し置いてと畑仕舞いの挨拶をする植の木も白木蓮も幹高く今を限りと鋸の歯入れる高木のなく庭に植えもせぬ南天蔓延り赤い実あまたまだいちども実をつけぬ柿係の柿枝切り揃え残す一本わが庭に心もとなく残る薔薇原種に戻るひと重紅色

檜垣美保子

川

・扉

三千回渡つたろうか東から西へとわたる橋やなぎばしわずかなる風を見せおり川端のしたれやなぎのみどりなき枝水の輪のふたつ交わりとけてゆく魚みえず鳥みえずいのちの気配引き潮の川の左岸にアオサギの一羽コサギの二羽鳴かず立つ石組みを驚掴みにしつややかな木肌の巨木を見あく月夜に午前三時目覚め眠れずあたらしき今日とおもいて朝の水飲むひきつりし足の痛みにたちつくす坂 うしろより「大丈夫ですか」

福田庸子

陽だまり

・今

光恋ふ季となりしよ満天星を染める朝朝いとほしくあり去年よりも嵩高くあり初役に今年の命を誉めあげゆかん筋雲に芒舞ふ広場陽だまりにブルーグラスのメロディ延びぬやうやうに色褪せゆける庭木木と今年の猛暑を語りあひたり柚子林檎今年の成りを煮つめたり籠もりある日の彩とせん連山に見守られるたしかさよ新しき年をさらに挑まん狂気と映るトランプの今の行状を後世人の評価知りたき

藤田美智子

ひもす鳥

・新

長旅の疲れはなきかクワクワと朝明けの空を渡りゆく声正夢であれかし無口なる少年が明るき声に合格を告ぐ思ひきり吉事を告げよ新しき年明けの朝を鳴くひもす鳥裸木の幹に力のみなぎりてまはりの空気をぐんと広げる雲に雨にそして雲へと変はりゆく水の自在をとくに羨む沼の底のしだいに深くなりゆけり冬のゆふへの闇深くして「お父さんが亡くなつたの」姫の声が携帯電話を震はせてゐる

## 藤森 巳行 熊

・銀

## 松本多摩子

娘を待つ

・桜

我が村に熊撃ちといふ獵師ゐる熊の胆高く売れると言へり  
熊玉は大きな玉なりそれを込め熊をめかけてズドンと放てり  
人間と共存できた熊もゐる足柄山の金太郎たちと  
新宿にジビエ料理の店があり鹿に猪熊を食べたり  
温暖化か冬眠しない熊増えて餌を求めて人里に出る  
人里を熊が徘徊住民は普段の方使、脅かされる  
熊だつて生きてゐるんだもと言ひ駆除に反対する人もゐる

## 本元由美子

歳晩

・岡

ひた土に触れて作りし白菜の霜降ることに純白となる  
開放の骨折をせし夫の手はひと月を経てなほ不憫なり  
正月のご神饌なる餅つきにやからの揃ふ臘月つごもり  
稲作は大和の民なる証にて正月餅のあやに尊し  
お日待ちをやからで祝ふ伝統を吾が八十に子が継ぎ呉る  
雪に光る立山連峰にあくがる心さまねし母の郷なれば  
歳晩の厨に並びさくさくと年越し蕎麦をのこらは料理する

## 牧 雄彦

秋・西山光明寺

・大

参道を覆ふもみち葉洩るる光前ゆく人の背に動きたり  
くれなるの楓葉続く参道の並木途絶えて静かなる空  
御堂より渡り廊下をきしまして歩めば秋の音が聞こえ来  
回廊の先に風のくれなるの燃ゆるが見えしほし動けず  
法然に教へを乞ひし直爽の心の闇を思ひみるなり  
西山は早や夕づきてもみち葉が斜めに差す日に透けて輝く  
気の迷ひ消えざるままに夕暮のひつち田に沿ふ雀帰りにゆく

あと四日あと三日だと娘を待ちて年末帰省老いの増しゆく  
子や孫は良い子で夫のなきことを事あることに言いし母あり  
当てにされ退いたつもりが退かぬまま忙しき今年瞬く間に過ぐ  
コマ回し上手に出来た一年生今日のヒーロー友の集まる  
三度目の車検を終える運転の卒業出来ぬ地方に住めば  
背の丈に伸びた薄を暮に刈る綿毛ふわふわ宙をさまよう  
通学に見たる夕日は格別で守る人あり我のふるさと

## 三浦好博

戦後百年は

・鏡

思はるる歴史修正主義そして陰謀史観 戦後百年は  
本を讀む歌をも作る我が家にてトイレは心の落ち着ける場所  
眼鏡探す君は冷蔵庫も開けるあり得ないことにはあらずなり  
冷蔵庫にお金を仕舞ふあ他人の事だと突つてる場合ではなし  
我が寿命少なくなれど物事を深く味はへる様にならぬを  
「支持政党なし」と告げれば格好いい上から目線の評論家です  
子の妻は外国人にてスパイだと疑はれやすき息殺しても

## 三木まり

灯

・昴

言えなくてたまつた言葉は星空へ宙の大河へ真冬の星々  
一日中鳴る耳鳴りに親しめば遠い星に旅する未来へ  
両の手を上げた先に星がある散りばめられた未来のかけら  
暗闇にフォグランプを灯すよう亡き友からのメール開けば  
月今宵消え入りそうな織月よ生まれてはまた明日へ消えゆく  
何者にもなれない私は何者も恐れずいられる聖夜の灯りよ  
過ぎ去つた刻よ真冬の星になりファンファーレ鳴らしつつ飛んでゆけ

## 宮本靖彦 歳末 ・ 凌

竹林の吠ゆるにも似たる師走風年も終りとうそぶく如し  
枯草の揺るる友の地売物件買主のなく今年過ぎゆく  
恒例の歳末寒き庭掃除手伝ひくれし孫は職場に  
継ぎくれし老人会よりクリスマス・スマホの動画目に新しく  
細月を見上げ歳末夕散歩我が影いよよ小さくなりぬ  
土おこし庭の花園春準備やうやく終りぬ夕暮近し  
日経の二頁埋むる赴きし偉人その多くは我より若し

## 三好聖三 ゆき ・ 伊

ツンとしていそよどりが窓辺で待っているはいはいすぐにと面を置きたり  
入港を待たされてる船かともひとつふたつと相模灘に浮かぶ  
切腹のシーンに始まる時代劇おつごもりの夜に見初める  
海坂を渡る船なく暮れたれば正月二日の雨戸を閉める  
澄みわたる冬の夜空にこだまする無人の駅の遮断機の音  
見返りを求めて寄付をするという不思議な国に初雪は降る  
火を貸してくださいというなつかしき耳語が聞こえる喫煙所はし

## 御代田澄江 小さき恩返し ・ 茨

重き病に伏す母に添はむと次兄宅へしばしば通ひし思ひ出づるは  
二分毎母を襲へる癌の痛みビビッと震へる母に寄り添ふ  
額の汗拭き水含ませつつ癌の痛みの凄き薬にと祈り願ひぬ  
朝となりやや落ち着きし母言へり「夕は寝なかつたらう少し横になれ」  
小学一年秋頃か吾一人ジフテリアに罹患喉塞がれぬ  
病果が喉を塞ぎて苦しむを母は膝に抱き四日四晩を  
ひそかにも吾は悟りをり兄宅へ通ひしはジフテリアの恩返しかと

## もとむらしげと 秋の雲 ・ そ

古希近き身を勞りて小一時間授業の合間を車内に休む  
背もたれを倒して見ゆる秋の雲その一角に父が現る  
羊雲の連なるなかへ吸われゆく三百人はいま雲の中  
母逝きて遺しし猫を膝に抱き飛行機雲を仰ぎたる日々  
庭の草抜きつつ想うつぶらなる黄の花咲かすこれは草かと  
草花と括りて言えば草も花も存在価値あり輝きてあり  
ひっそりと実りて熟れて落ちてゆけり高き枝から柿の実一つ

## 桃原佳子 あけくれ ・ 沖

庭の木の枝から枝へ蜘蛛の巣の風に揺れつつ朝日にきらめく  
鳥運ぶ種より生えたか夫の言う心当たりのない庭の花  
身に沁みて青空うれし曇り日は心も沈む老いのあけくれ  
もう終りと思ひし頃に娘の不幸思えば残れる力湧きくる  
新しい季節に入れり北風に揺らぐ金柑たわわに色づく  
きらきらと風花青き空を舞う触ればふいと消えるはかなき  
朝の日に輝きながら移りゆく白雲の群れ雲足早し

## 山下雅子 めくもり ・ 習

手を振りておはよう交わす所長さん馴染みの笑顔まこになりゆく  
定期便の娘の声ひびく朝七時施設のわれに今日の始まり  
配膳を待つ静かなるひとときよ師走尽日つつがなくあれ  
函館の大火十七時間燃ゆ熊も出てくる令和の事なり  
アスファルト舗装道路の上火とは思ひもよらぬいろありて  
カシミヤのロングベストに包まれて賜わりしぬくもりほっこり抱く  
窓ごしに冠雪かがよう厳しき富士を望みぬ心ゆくまで

山野 幸司 餅

・沖

餅搗きに集う三人娘子らを連れ飽かず語れる夕暮れんとす  
冬の庭一人相撲をとる影に雀は来たり鳴きて去りにし  
庭陰に置かれしままの石臼の逆さの上に雀ら遊ぶ  
透き通る心を持っては新年もかなしき出来事崩れて果てぬ  
株高とニュースは告げる今の世に万円札は直ぐ飛んで行く  
派手派手の衣装着飾る会場に飛び交う会話枯葉のようだ  
老人の介護の日々をおおらかに語る婦人は大きく見える

山本 孟

向う正面

・大

潜航艇低く巨体にぶちあたり九州に咲く花安青錦  
向う正面晴れ着の女性のほほあみを動く行司の間に見ゆる  
短歌の俵、俳句の夏井「若者よ来たれ」と呼びかけ明日の扉叩く  
孤り居の金銭のならぬ木に花咲かす短歌楽しくて老いを重ぬる  
老翁も普通生きて「寿」と言はず珈琲を飲み日々無為無策  
六甲の稜線くつきりの夕映えにしほし心に秋の花咲かす  
診察の終はれば秋の道暗く空の明るみ落ちゆくを見る

養学 登志子

黒豆と雑魚

・凌

針持てば通せるのと言う乱視ならばあまたの耳のどれかに通るよ  
微妙なるすれの針穴そのひとつにどれかの糸先ひとつが通る  
二日月三日かとも見上げれば細月三つ四つならび赫く  
わが友は三十六本歯をそろえ虫歯もあらず卒寿も近きに  
われの歯は親知らずなし虫歯なし共にめずらしがられて来しも  
友は丹波われは瀬戸内黒豆と雑魚のきたえし歯かもしれない  
もうつつ手はなきを告げられよしとせむ黄泉を夢みつつひととせも過ぐ

横田 敏子 冬

・福

ひと夏を厭いし太陽冬来れば待ち焦れおり今日も雪空  
凍えそうな寒さの中に咲き続くピオラの小さきうすき花びら  
傍げに見ゆるピオラの秘めている命の力に及ばずわれは  
山茶花の咲き終りたる冬庭に黄楊と伽羅の木ひと回り太し  
疲れ来て見上ぐる冬の青空に綿菓子のような雲が三つ四つ  
冬の雲斯くもやさしき形とは初めて知りぬ知りて安らく  
ほんやりと過こせば見逃しておりしやも この冬空のこの静謐感を

久我 田鶴子

日常

・羊

ちかごろは夢ばかり見る とある日は柄本明を追ひかけたリして  
リサイクルで劣化する質みづからの首を締めつつ滅びに向かふ  
かげのこゑどの面さけてと手きびしき 過去にならざる声を聴きをり  
とどこほる時がいつきに流れだしや蹟かぬはうが無理といふもの  
頑張つて堪へてきたるツケなりや転げるやうに老ゆるといふは  
読み書きをもちやせぬこと伝へくる賀状の返しその娘より  
ほんたうは信じてをらぬなりゆきに今も鮮やか歌に遊びし日

